

# 赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

# NEWS

# 4

April 2026  
#1031

赤十字NEWS  
オンライン版はコチラ



# 1877 西南戦争

西南戦争に従事した  
救護員は延べ**199人**、  
救護した負傷兵は**1429人**。

止血や外傷の手当て 感染症対応 医療物資の調達 軍との交渉・調整



## 質の高い 救護員を

## 確保する 必要が!



特集 ▶ P.2

## あきらめない看護

赤十字の気づき 救護は誰でもできる仕事ではない

敵も味方も、  
救う。



佐野常民

### 救護員の確保と養成

日赤の創設者、佐野常民は西南戦争の経験から、「救護員の確保」に強い問題意識を持ち、力を注ぐようになります。「**平時から人を育てて、蓄えておく必要がある**」

➡ **現代の看護教育へ!**

赤十字のいま 人を救う活動のため、「人」を育てる



### 現在の看護教育

日赤看護大学: **6校** 看護師養成の歴史: **136年**  
赤十字看護専門学校: **9校** 年間の養成数: **約1100人**  
(2026年3月時点)

CONTENTS

### TOPICS

東日本大震災発生から15年  
救護の記憶を、次の世代へ ..... P.4

想いの力を、救う力に。  
5月、赤十字の理念と活動を広く伝える「赤十字運動月間」  
..... P.5

### 連載

海外派遣の現場から マレーシア編 ..... P.4  
けんけつのいま ..... P.5

### AREA NEWS

[ 埼玉 ] 赤十字病院職員が救護ランナーに  
マラソン大会の安全な運営をサポート!

[ 静岡 ] 最優秀賞は「イカ飯」  
地域赤十字奉仕団の  
炊き出しレシピコンテスト / 他  
..... P.6

### WORLD NEWS

大地震を乗り越え  
トルコ赤新月社、「3.11」被災地訪問 ..... P.8

### Present!

A: 書籍  
『明治のナイチンゲール  
おおげき ちか  
大関和物語』  
**10名様**

B: 日赤看護大  
40周年記念グッズ  
(3点セット)  
**10名様**

詳しくはP.7をCheck! ▶

SPECIAL FEATURE

# あきらめない看護

事故で脳に障害を負い、会話もできず寝たきりだった少年が、20年後には走って、家族と笑いあえるように…。奇跡のような変化をもたらしたのは、「その人が持つ力」を信じて続けられた、ある看護メソッドでした。今回は、その理論と技術を指導に取り入れている京都第二赤十字看護専門学校の授業に密着。取材を通して見てきたのは、「誰かの命(人生)を支える喜び」という赤十字マインド、そのものでした。



**Point**  
ナーシングバイオメカニクスの「ナーシングムーブメント」のポイントは用手的\*微振動で「筋肉の拘縮をほぐし」、「脳に感覚を入力」させること。ベッドから動けない患者でも、バランスボールを膝の下に入れて上下、前後、左右に揺らすことで、股関節にまで振動が行き渡って体の拘縮に働きかけることができる  
\*看護・リハビリテーション用語で、用手=手を用いる、用手的=手の代わり何かを用いて、の意味



京都第二赤十字看護専門学校副校長  
こゑし ま かずみ  
副島 和美 先生

## どう生きるか、という尊厳を守る

### 赤十字の理念にも通じる看護メソッド

重度の意識障害がある患者のために開発された「ナーシングバイオメカニクス\*1」。私がこの理論に出会ったのは2013年ごろ。このメソッドを開発した紙屋克子先生の思いと、その成果を知ったとき、衝撃を受けました。病棟の看護師として、寝たきりの患者を担当した紙屋先生。あるとき、患者の母親が毎日ベッドの横に立ち、「何とかして、この子を立たせたい」というような努力をする姿を見て、**ただ命を救うための看護ではなく、その人の人生を取り戻す看護をしよう**と決意したそうです。そこから、その方の機能回復をめざして試行錯誤し、数年後、自力で立てる状態にまで回復。この思想と実践こそ、まさに赤十字の看護理念そのものだと感じ、すぐに、実践研究を続ける紙屋先生の門をたたきました。

指導を受ける中で、先生とそのチームの献身的な看護によって奇跡的な回復を遂げた患者さんたちとも接する機会を得ました。Aさんは、20数年前に事故に遭い、脳の損傷により寝たきりになりましたが、紙屋先生は決してあきらめず、その方の残存機能を活用しながら、少しずつ回復力を引き出す看護を続けました。先生を慕う専門職のボランティアチームが、訪問を20年以上継続し、今では走ることも字を書くこともできるようになっています。また、部活中に倒れ、低酸素脳症によって寝たきりになったBさんも、このメソッドによって意識が回復し、今ではプールでリハビリができるまでに。紙屋先生は、彼がまだ見た目には寝たきりの状態にあったとき、彼の体に触れ「意識が戻っている」と気づいたそうです。それには、後に患者

本人も「どうして先生は僕の意識が戻っていることに気がついたのですか?」と驚きを語ったほど。紙屋先生は、「**家族があきらめなければ、私たちは絶対にあきらめない**」と言って、患者さんのどんなサインも見逃さない。**家族と一緒に全力で回復を目指す、そこに私も関わらせていただけること、看護師になってよかった**、と感動しました。

### 病院だけでなくご自宅でも

#### 患者と家族が救われる技術

このメソッドは、意識障害の方だけでなく、介護度の高い高齢者や障害者の身体機能の向上や生活支援にも有効です。本学では1年生からカリキュラムを組み、学生同士の練習だけでなく、病院実習にも導入しています。用手的微振動を行うと、体がこわばって腕が伸ばせず、血圧を測るのすら困難な患者さんの拘縮\*2が改善し、腕や握った手の指が伸びたり、同じく脚が拘縮しておむつ替えが辛い患者さんが、楽におむつ替えできるようになったり、現場ではさまざまな成功例が。このメソッドは患者家族や一般の方も実践できる一方で、対象者の体の状態を的確に判断しないと、もろくなっている関節や骨を痛める可能性もあります。だからこそ、看護学生には、患者を心地よくする技術だけでなく、危険も回避する確かな知識を伝えるため、ときに厳しく指導しています。患者さんの人生に寄り添い、その方の「尊厳を守る」メソッドですから、これらを普及させることも、赤十字らしい活動なのではないか、と感じています。

\*2 筋肉や関節が固くなり、手足や体が動かしにくくなる状態

\*1 ナーシング(Nursing) = その人らしく生きることを支える行為(看護) + バイオメカニクス(Biomechanics) = 人体の構造や掛かる力などの条件がそろって、簡単に動ける理論(生体力学)を基礎に、文化や心理に関する知見を統合して確立する生活支援の技術

## 「ナーシングバイオメカニクス」

意識障害を持つ患者の回復を促進し、自立した生活を送るための支援を目的として開発された、解剖学、生理学、病態学、運動力学などの理論に基づいたメソッド「ナーシングバイオメカニクス」。バランスボールなどを用いることで、患者自身の表現や行動の自立を助け、看護や介護をする側も必要最小限の力で済む技術として、実践研究が進められている。この技術の第一人者として長年実践と普

看護師があきらめなければ、患者が持つ力を引き出せる!

及に尽力してきた日本ヒューマンナーシング研究会理事長の紙屋克子さんは、その功績を讃えられ、昨年フローレンス・ナイチンゲール記章を授与された。授与式での講演では、「(植物状態で)意思の表出が困難な患者さんでも、**毎日手を握って声をかけ続けていると、患者さんの発するサインを感じ取ることができます**。それにしっかり意味を持たせることが、「あきらめない看護」の原点です」と語った。



皇后陛下からF・ナイチンゲール記章を授与される紙屋さん。79歳の今もなお、現役の看護師と同じ目線に立って技術の普及に励み、患者と共に歩みながらアップデートを続ける



**Point**  
手を用いて筋肉や関節に細かな振動を与える「用手微振動」は患者役の学生から思わず「気持ちいい…」という声も。一方で、小さなバランスボールで行う「用手的微振動」は力加減が容易に行えるという利点がある



①大きなバランスボールを抱え、ボールの反発力を借りることで重心移動をスムーズにし、少ない力で起き上がらせる技術。患者自身が頭を自分で支える「頸部コントロール」の力もつく ②左は副島副校長自ら作成した講義のためのテキスト。バランスボールは、パンパンに空気を詰めず、60〜80%の状態にすることで、体の広い部位に働きかけることができる ③車椅子に乗った状態で、バランスボールに足を乗せて足踏みをすることで、脳と体に脚を使う感覚を呼び戻す

## Teacher's Voices

脳神経外科に勤めていたとき、意識障害で体の拘縮も強く、血圧測定もおむつ替えもとても苦しそうな表情を浮かべる患者さんに対して、実習指導に来ていた副島先生のアドバイスでこの技術を取り入れられました。すると、拘縮が緩み、血圧測定もおむつ交換もスムーズに。**ご家族から「こんなに安らいだ顔が見られてうれい!」**と感謝の言葉をいただいたことが忘れられません。



たておか よりこ  
立岡 葉里子 先生



こいずみ まきこ  
小泉 真希子 先生

以前働いていた呼吸器科では、状態が良くなるようにと考えても、**患者さんがどう生きていきたいか**を考える余裕がありませんでした。でもこの技術には2分、3分でもできることがたくさんあり、それを積み重ねれば苦痛を軽減できる。その患者さんの「こうありたい」を一緒に目指せるのです。それを学生に指導しながら私も学んで、**自分がやりたかった看護の原点に戻れた**気がしています。

おばら まなみ  
小原 真菜美 先生

病院では、救急で運ばれて入院する方や集中治療室を出たばかりの患者さんを担当していました。命優先の現場で、とにかく**生かすための看護に集中していましたが**、半年前に学校で指導する立場になってこの技術を知り、こういう関わり方があったのかと驚きました。**触れることの意味、手の温もりを伝える看護の大切さ**を改めて感じて、学生と共に看護技術をアップデートしているところです。

## Student's Voices

たなか みゆう  
田中 心結さん



メソッドを教わるときに合言葉のように先生が繰り返すのが「**1ケア、1ギフト、1リハビリ**」。「患者さんに1つケアを施すことで、何かしらの心地よさ(=ギフト)とリハビリにつながる動きが1セットになるようにしましょう」という考えなのですが、看護をしながらこの3つが同時に提供できるのがすごい、と驚きながら学んでいます。



ささき りんこ  
佐々木 凜子さん

ナーシングバイオメカニクスの授業を受けるまでは、患者さんの体を動かすシミュレーションでも「安全に」や「上手に」と考えて、「相手が心地いいように」というところまで気が回りませんでした。この技術の習得を通して、**優しく触れる、優しく手を握るといった、安心感を与えられる看護の大切さ**を実感しています。

たちかわ はるか  
立川 遼さん



看護師は患者さんに触れさせていただきませんが、体を動かすときの包み込み方や触り方一つ一つに工夫が必要なことを学びました。手を使う「用手微振動」の良さ、手の代わりのバランスボールを使った「用手的微振動」のコツや加減も、**される側の感覚がわかるように学ぶ**ので、患者さんの立場になった看護を考えやすかったです。

# T O P I C S

## 1 TOPICS

### 東日本大震災発生から15年 救護の記憶を、次の世代へ



講演会に登壇する植田さん(左)と久保さん(中)

今年3月、日赤本社(東京都港区)で講演会が開催されました。テーマは「若手職員につなぐ～当時の思いを未来へ～」。

現在の日赤職員は、その6割が東日本大震災後の入社です。震災を経験していない世代に、当時の経験を伝えるため、この講演会が企画されました。

登壇するのは、救護活動の最前線にいた職員たちです。

医師の植田信策さんは、震災当時、石巻赤十字病院の呼吸器外科副部長。まさに手術室でメスを持つところで大地震が発生し、救護体制へと突入しました。石巻赤十字病院は、いつか来る津波災害に備えて震災の5年前に内陸に移転、免震構造含め、設備の備えは万全でした。その結果、唯一稼働する総合病院として石巻医療圏

の砦となりました。病院には患者の3日分の食糧が備蓄されていましたが、職員の分がなく、医療従事者たちは空腹に耐えながら活動。また、病院に残った職員の中にも、家族が犠牲になった者が多数いました。避難生活が長引く中、病院に運ばれる患者の傾向に疑問を抱いた植田さんは、避難所を調査して回ります。そこで、ある問題に気づいたと語ります。「32カ所の避難所を調べ、エコノミークラス候群(血栓)が見つかった確率が100人中2.8人。そこで段ボールベッドを導入したところ、さまざまな症状が改善しました。国にも働きかけ、今のガイドラインにつながっています」。

続いて登壇した日赤福島県支部の久保芳宏さんは、同支部の災害対策本部で調整役を務めています。当時の日赤救護班は放射能汚染下での活動方針を定めておらず、原発事故によって、県外から福島に派遣された救護班が一時撤退せざるを得ない状況となったことを振り返ります。「避難者からは、置いて逃げるのかと非難され、その罪悪感で救護班は非常に辛い思いをしました。残った福島県支部職員だけでできる限りの活動をしましたが、ある福祉施設から高齢者を避難させる際、バスの

運転手さんに『同じ福島県民を、なんとか助けてあげてください』と言われたことが忘れられません」

講演を聞いた若手職員の一人は、「(災害対応に臨む際には)自分にできることを迅速にやっという決意が持てました」と、感想を述べました。

震災発生から15年。最前線での記憶は、熱い思いと共に次世代へと受け継がれています。

野戦病院さながらの石巻赤十字病院ロビー



野戦病院さながらの石巻赤十字病院ロビー



活動中に放射線数値を計測される福島赤十字病院救護班

## Vol.5 海外派遣の現場から マレーシア編

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。赤十字の国際要員たちが見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。



リポーター 三亀 恭子 さん

### 知らないから怖い。知れば、近づける

マレーシアのIFRC\*地域事務所に出向中の三亀です。海外の現地オフィスで働いていると、多くの「違い」に出会います。私のチームはアジア大洋州地域にある38の赤十字社・赤新月社を担当しています。災害支援に重点を置く社もあれば、保健医療や若者の参加を重視する社もあります。各社は、それぞれ異なる文化的背景や優先課題を持っています。ユースボランティア向けのワークショップを実施する際にも、「違い」が表れます。たとえば、東アジアでは時間を守り、説明を聞いてから実践する傾向が。一方、フィジーなどの大洋州では「その日に何を達成するか」を大切に、質問や意見が自然に飛び交います。私は日本人だからか、時間通りに進まない不安を感じることも…。それでも、学びの主役はユースであることを

忘れず、その場にに合わせて工夫し、進行しています。先日、茨城・栃木・群馬県支部の青少年赤十字メンバーが国際交流事業の一環でアラルランプールを訪れ、マレーシア赤新月社のユースと親睦を深めました。現地校でお互いの文化や赤十字活動を発表するなど、笑顔あふれる交流となりました。このイベントに先立ち、両国メンバーにお願いしたのは「違いを体験から学び、互いを尊重して接すること」でした。写真を撮る前の一声。距離感への配慮。セレモニーを大切に文化への理解。ほんの少し背景を共有するだけで、相手への印象は変わります。「知らないから怖い。知れば仲良くなれる。」「違いを理解し、柔軟に向き合う姿勢が大切。」ユースがそのことを自然と体験し、互いの理解が育まれている姿を見て、国際交流の意義をあらためて考えました。



現地校での交流。文化を紹介し合う青少年赤十字メンバーと赤新月社ユースボランティアたち



オフィスでも、ささやかな文化交流。IFRCのスタッフに茶道のお茶の点て方を伝える日赤職員(右)

\*国際赤十字・赤新月社連盟:191の国と地域にある赤十字・赤新月社の連合体

2 TOPICS

# 想いの力を、救う力に。

## 5月、赤十字の理念と活動を広く伝える「赤十字運動月間」



毎年5月は、「赤十字運動月間」です。赤十字の理念や活動を広く知っていただき、活動に参加される方の輪を広げるための1カ月間。今年度は、「想いの力を、救う力に。」をメッセージに掲げ、赤十字の活動を支える、一人一人の想いに光を当てます。

ポスターでは、上白石萌音さんがその想いを象徴する存在として登場。強い意志を宿したまなざしで、誰かを救うために前へと踏み出す、赤十字が動き出す瞬間を感じさせるシーンとなっています。

「誰かを救いたい」「誰かの役に立ちたい」。そうした想いは、赤十字で活動する職員だけでなく、多くの人の心の中にあるものです。**その想いが行動となり、人を支える力となっていく**——そんなつながりを、このコピーで表現しています。

日本赤十字社は、来年創立150周年を迎えます。ポスターには、これまで積み重ねてきた信頼とともに、次の時代へ向かって前進していく赤十字の姿と、その躍動感が重ねられています。

赤十字運動月間は、そうした想いを行動へつなげていく機会でもあります。皆様には日赤の理念や活動にご理解いただくとともに、ご支援をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

赤十字運動月間のQ&A

✓ 赤十字運動月間って、どんな月？

多くの方に赤十字の理念や活動を知っていただき、ご協力をお願いするため、特設サイトやテレビ・WEB CMなど、さまざまな形で情報を発信しています。

✓ 赤十字の活動に参加するには？

次の参加方法があります。①奉仕団・個人ボランティア\*、②各種の講習受講\*、③青少年赤十字、④献血への協力、⑤関心を寄せていただき周囲に広める、⑥会員になる(寄付による赤十字活動参加)



詳しくはこちら

\*お住まいの地域の日赤支部で参加が可能です。

✓ 活動資金と義援金、どう違う？

日赤に寄せられる主な寄付には、「活動資金」と「義援金」があります。活動資金は、命を救う・守るための日赤の事業に活用されます。一方、義援金は、被災された方々の生活支援のため、自治体などに全額送金され、被災者へ配分されます。



詳しくは日赤WEBサイトで  
特設サイトは4月20日公開予定

# けんけつのいま

支える命、つなぐ未来。 vol.13

献血に関するさまざまな取り組みを紹介します。

今回は福井県

Promoting Blood Donation

## 自分も救う側なのだ実感した日

日赤は救護組織です。そのため、全ての日赤支部・病院で、医療救護班が有事に備えています。では、血液製剤の安定供給を担う日赤の血液事業はどうでしょう？ 災害という非常事態発生時の対応は？ 福井県赤十字血液センターの入社1年目職員で、初めて災害対策訓練に臨んだ原暖華さんは、その訓練での経験を次のように振り返ります。

「私は、血液供給要員として参加しました。災害対策本部の下で医療資源(人・モノ・情報)を管理する合同調整所から血液製剤の要請を受け、救護の現場で指示を出す指揮所に納品し、ドクターの内容確認後、血液製剤を応急救護所へ搬送するという流れです。参加する前は、その訓練がどの程度の緊張感があるものか、想像できていませんでした。訓練は開始するや否や、消防、自衛隊、医療機関が秒刻みで連携して動きます。私は血液製剤を指揮所に届け、その

種類を報告する場面で、セリフが飛んでしまいました。とっさに、血液製剤の納品を受けたドクターが、私が伝えるべき言葉を代わりに言ってくれました。訓練のシナリオは、頭に入っていたはずなのに…」

原さんは、総務課の職員で、血液製剤の供給を担当したことがなく、入社1年未満なので関わった業務も限られていました。しかし**災害時には、血液センターの全職員が災害医療を支えます**。災害対策訓練への参加で、日赤職員がどのような使命を持っているか、身をもって体験した原さんは、改めて自分の立場を自覚しました。

「訓練会場では情報が次々に入ってきて、状況の把握・判断の難しさもある上、たくさんの人が同時に動く中で予想外のことも起きていました。**訓練とはいえ、臨場感がありましたし、入社前に知識としてイメージしていた救護活動の実際が分かり、自分も命を救う組織の一員なのだ、と実感しました**」



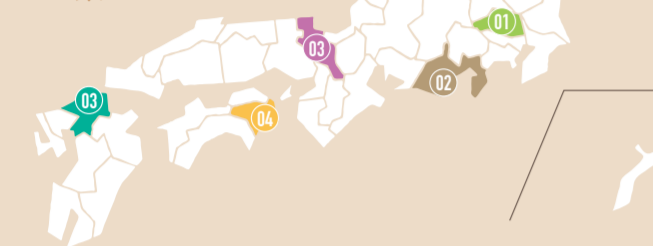
赤血球製剤(ダミー)を納品する原さん(右端)



応急救護所の内部。訓練は本番さながらの緊張感の中で行われた

# Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで  
日本赤十字社の活動は行われています。

# Area News



## 赤十字病院職員が救護ランナーに マラソン大会の安全な運営をサポート!



埼玉県・深谷赤十字病院は、市などが主催する「ふかやシティハーフマラソン」に、毎年救護ランナーとして参加しています。今年は2月22日に開催され、有志の職員が5キロ、10キロ、ハーフの各コースに分かれて、ペースランナーも兼ねて参加者と一緒に走りました。救護ランナーは、応急手当てキットを携帯して走り、具合が悪い参加者がいたら必要に応じた手当てを行います。その場での対応が難しい場合は、救護本部と連携して搬送も。参加職員は、事前にコース確認や心肺蘇生の実技確認を行い当日に備えました。幸い大きな救護対応が起きることなく無事終了。地域住民との交流を深める良い機会ともなりました。



## 各地で防災セミナーや体験学習を開催 小学生にも、視覚障害者にも、命を守る学びを



日赤徳島県支部は2月10日、青少年赤十字(JRC)に加盟したばかりの藍住西幼稚園で炊き出し訓練と防災セミナーを実施。園児や教職員、ボランティアら約140人が参加しました。災害用の炊き出し釜と炊飯袋で、米粉蒸しパン作りをしたほか、防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん!」を使った防災セミナーも。園児たちは、危険な場所や安全な行動について主体的に学びました。(1)

また、2月11日には、県内のJRC高校生メンバーを対象に冬期学習会を開催しました。東日本大震災発生から15年の節目として、当時被災地に派遣された同支部の救護員や奉仕団員が、現地での活動や支援について説明したほか、実際に被災地で提供された「阿波牛の牛丼」を再現する炊き出し訓練や食物アレルギーへの配慮について考えるワークショップも。「食の支援」を学ぶ機会となりました。(2)

山形県支部では、2月14日に小学生対象の体験学習「レッドクロスキップやまがた」を実施しました。JRC未加盟校も含む小学生と保護者22人が参加し、JRC高校生メンバーが運営ボランティアとして協力。救護物資の備蓄倉庫見学や防災かるた、ダンボールベッド作り、救急法などを通して赤十字事業を体験し、「体が濡れている人にAEDを使っても大丈夫?」と質問が出るなど、積極的な姿が見られ、加盟・未加盟の枠を超えて、赤十字事業を知ってもらう機会となりました。(3)

青森県支部では、一般社団法人青森県視覚障害者福祉会の依頼で、3月1日に視覚障害者を対象に防災セミナーを開催し、同会員やボランティアら30人が参加しました。「点訳・音訳・デイズー編集奉仕団」の協力で作成した防災資料で学んだほか、防災用品に実際に触れる体験も。参加者は、「2日分の非常持ち出し袋が思った以上に重かった」など、多くの気づきを得ることができました。(4)



## 最優秀賞は「イカ飯」 地域赤十字奉仕団の 炊き出しレシピコンテスト



日赤静岡県支部では、2月13日に「災害時に役立つ! 包装食袋炊き出しレシピコンテスト」を開催しました。県内から、包装食袋(耐熱性のポリ袋)を使用した炊き出しを得意とする10の地域赤十字奉仕団が集まり、「災害時の在宅避難」を想定した新たなレシピ開発に挑戦しました。主食、副食、スイーツなど、あわせて28のレシピが考案され、各テーブルに分かれて調理を実施。「調理が簡単」も審査基準とあって、審査員は作業工程から真剣に確認して回りました。完成した料理は、審査員はもちろん、奉仕団員たちも試食しながら工夫点を共有し、日頃の活動の情報を交換しあう姿も。審査の結果、島田市赤十字奉仕団の「イカ飯」が最優秀賞に輝きました。支部では災害時の自助に役立つことを願い、他の優秀賞などもまとめたレシピ集を支部WEBサイトで公開予定です。



## 傷病者役の 看護学生が活躍! 災害時に備えた 救護訓練を実施



日赤福岡県支部は、1月31日・2月1日の2日間、久留米赤十字会館にて、令和7年度第6ブロック赤十字救護班研修会を開催しました。118人が参加し、1日目は災害救護活動の法的根拠や指揮命令系統、関係機関との連携について学ぶ座学研修を行いました。2日目は、「病院支援」と「避難所支援」をテーマに、実動訓練を実施。最後に活動報告を行い、災害対応力の向上を図りました。(1)

京都府支部は、2月7日に合同災害救護訓練を実施しました。京都第一・第二赤十字病院や京都第一・第二赤十字看護専門学校、ボランティアなど総勢90人が参加。傷病者役を務めた看護学生のリアルな反応は訓練に臨場感を生みました。学生からは、「将来は救護班の一員として活動したい」といった抱負も聞かれ、災害時の医療現場において“寄り添う姿勢”の大切さを学ぶ機会になりました。(2)

### 常任理事会開催報告

令和8年2月27日、令和7年度第10回の常任理事会が開催されました。その結果は下記のとおりです。

記

- 救護・社会活動の資金的基盤の強化に向けた取り組みについて
- 理事会に付議する事項について  
(1) 規則の改正について  
ア. 日本赤十字社本社組織規則の一部改正
- 理事会及び第107回代議員会に付議する事項について  
(1) 役員選出 (2) 令和8年度事業計画 (3) 令和8年度収支予算

審議の結果、上記1は今後の方針や取り組みについて了承されました。また、上記2については原案のとおり令和8年3月19日開催の理事会に、上記3については原案のとおり同日開催の理事会及び第107回代議員会に、それぞれ付議することが了承されました。

令和8年3月18日、令和8年度第11回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、役員選出について審議し、原案のとおり令和8年3月19日開催の理事会及び第107回代議員会に付議することが了承されました。また、令和8年度の広報戦略等について報告しました。

### 理事会開催報告

令和8年3月19日、全国社会福祉協議会会議室(新霞が関ビル)において令和8年度第3回の理事会が開催されました。審議結果は下記のとおりです。

記

- 規則の改正について  
(日本赤十字社本社組織規則の一部改正)
  - 第107回代議員会に付議する事項について  
(役員選出、令和8年度事業計画、令和8年度収支予算)
- 審議の結果、原案のとおり第107回代議員会に付議することが了承されました。
- また、常任理事会の理事の互選が行われ、渡邊芳樹、工藤祐三、高井盛雄、浅井隆彦、澤田清一、松村誠、上間優の各氏が選出されました。業務執行理事については、手塚直樹、紀野修一の各氏が指名されました。
- 加えて、日本赤十字社創立150周年プロジェクトについて報告しました。

### 代議員会審議結果公告

令和8年3月19日、本社協・灘尾ホール(新霞が関ビル)において開催した第107回代議員会における審議結果は下記のとおりです。  
令和8年4月1日  
日本赤十字社

記

- 第1号議案 役員選出について  
理事16名が次のとおり選出されました。  
理事 渡邊芳樹 手塚直樹 紀野修一 田中康夫 成田耕造  
江畑佳明 小田部卓 最上重夫 高井盛雄 持木一茂  
木村健二 菊地豊 勝山正昭 中谷博昭 木谷聡一  
小田切泰禎
- 第2号議案 令和8年度事業計画について  
原案のとおり議決されました。
- 第3号議案 令和8年度収支予算について  
原案のとおり議決されました。



## 赤十字と看護師

日赤は西南戦争の救護活動で、救護を行う人材の不足に直面したことから、**救護員の確保と養成のため、1886年に「博愛社病院(現日本赤十字社医療センター)」を設立。教育環境を整え1890年から養成を開始しました。救護を担う看護師の養成は日赤の大切な使命の1つ。**  
今回は、「赤十字と看護師」をテーマに2つのプレゼントをご用意しました。

### プレゼントA

書籍 『**明治のナイチンゲール 大関和物語**』  
おおぜき ちか

近代看護がまだ社会に根付いていなかった明治の時代、看護婦は「卑しい職業」とさえ見られることがありました。そうした風潮の中で、看護という仕事の価値を信じ、その道を切り開こうとした女性が関和です。本書は、日本の近代看護の黎明期に生きた彼女の歩みを描いた一冊。  
関東大震災の際に、和が率いた大関看護婦会の看護婦たちは救護活動にあたりました。あまりの被害の大きさに加え、火の手まで上がって呆然とする和の前に現れた、堂々たる看護婦の団。「日赤です! 赤十字の旗を掲げています!」——その声と赤十字の旗に、孤軍奮闘していた和たちは大きな勇気を得たと言います。  
なお、「明治のナイチンゲール 大関和物語」の著者は、NHKの連続テレビ小説「風、薫る」の原案者です。

田中ひかる 著/中央公論新社 発行

### プレゼントB

日赤看護大40周年記念グッズ(3点セット)

日本赤十字看護大学は2026年に開学40周年を迎えました。日赤の看護婦養成の歴史は1890年にさかのぼりますが、1986年に大学を開学してから、4763人を超える学部卒業生、980人の修士、138人の博士を送り出し、卒業生たちは全国の赤十字病院などで地域医療を支え、また教育・研究者として看護学の発展に寄与しています。今回は、日赤看護大から40周年記念のオリジナルグッズをプレゼント。

10名様に当たる!

10名様に当たる!

開学40周年記念特設サイトはこちら

QRコード

### 赤十字NEWSオンライン版はコチラ

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!

プレゼント希望者は右の二次元コードからご応募ください。  
応募締め切り: 2026年4月30日(木)  
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

# 大地震を乗り越え

# トルコ赤新月社、「3.11」被災地訪問



## 何が起こったの？

壊滅的な被害を受けた被災地(トルコ) ©TRCS

- ✓ 2023年2月、トルコ・シリア地震が発生
- ✓ 震源はトルコ南東部。約6万人が犠牲に
- ✓ 発生から3年。トルコは復興のフェーズへ

大地震の教訓を共有し未来につなげるため  
トルコから来日、3.11の被災地・石巻を訪問

- ### トルコでの活動
- ・救急法や感染症予防などの地域保健支援
  - ・清潔な水、シャワーなどを提供する給水・衛生支援
  - ・献血センターや献血ルームの建設 など

## 石巻視察での「学び」



“地震災害に対する  
最善の備えは「訓練と伝承」”

## 赤十字の取り組み トルコ×日本

\* 東日本大震災の記憶と教訓を未来につなぐために2021年から続く「JRCオンライン語り部ライブ」

# 同じ地震大国として、災害の教訓を共有し、助け合える未来へ

日赤では、トルコ・シリア地震発災直後から職員を現地  
に派遣し、被災された人々が最も必要とする支援を続けて  
きました。トルコにおいては、緊急の物資支援や現金給付  
だけでなく、仮設住宅での「地域保健支援」に、浄水車両の  
調達、献血ルームの新規移設などの支援を行い、現地の復  
興を後押ししています。トルコも日本と同様に地震大国で  
すが、2023年の被害は想定を大きく超え、**トルコ赤新月  
社(以下、トルコ赤)はその教訓から、防災・減災事業を  
強化する方針を決定**。多くの大地震を乗り越えてきた日本  
と学び合うことを目的とし、今回の来日が実現しました。

宮城県・石巻市を訪れた一行は、まず、津波と津波火災  
の被害状況を残す、石巻市震災遺構 門脇小学校を訪問。  
東日本大震災の語り部・高橋正子さんの案内で、**津波で  
破壊された校舎1階、火災で焼き尽くされた2階を回り、**



左:  
門脇小学校を視察する  
トルコ赤スタッフ。  
語り部・高橋さんの話  
に真剣に耳を傾ける

右:  
石巻高校にて。  
生徒たちにトルコの現状  
を報告するムラットさん

体育館に展示される**当時の仮設住宅**や、生徒たちが避難  
した**高台への経路を見学**しました。実際に仮設住宅で生  
活していた高橋さんが涙ながらに当時の状況を語る姿  
に、**トルコ赤のメンバーが目を潤ませるシーン**も。その後、  
隣接するNPO法人3.11メモリアルネットワークが運営する  
「Meet門脇」を訪問し、石巻市内の全体の被災状況と  
復興、防災対策について説明を受けました。最後に青少年  
赤十字加盟校の石巻高校にて、**生徒と共に語り部ライブ\*  
に参加**し、トルコ赤の救援活動報告と生徒たちの防災  
活動発表などを行い、交流を深めました。



校舎1階、当時職員室だった一角。卒業式直前で金庫には卒業証書が。震災後、金庫をこじ開けて証書を取り出した形跡が残っている

## VOICE トルコ赤の声



ムラット・セザールさん

**遺** 構施設の内部を見て、津波の脅威を  
実感し、言葉になりませんでした。  
しかし、在校生が避難できて命が助かったと  
いうことは、災害時に危険を回避する意識づ  
けがしっかりできていた証です。それこそが  
被害を減らす備えだと納得しました。教育の  
場では生徒同士が知識を共有し、その活動  
を日赤が支え、日本政府も後押ししている。  
**まるでパズルのように、それぞれのピースが  
かみ合せて協力しています。**防災の仕組みと  
してよく機能しているのです。トルコでも同  
じようなことを実現できれば、と思いました。

## VOICE 語り部の声

たかはし しょうこ  
高橋 正子さん



門脇小学校体育館内に展示される仮設住宅前で、涙ながらに当時の状況を語る高橋さん

**私** は、津波で自宅が流され、1カ月ほど避難所で生活し  
た後、仮設住宅に移りました。そこでいただいた冷蔵庫  
や炊飯器など、生活に欠かせない家電一式は赤十字を通  
じて集められた海外の寄付によるものと知り、感謝が胸が  
いっぱいになりました。他にも、石巻では発災後2日間で  
1000人ものボランティアが駆けつけ、荒れ果てた街を片付  
けてくれました。**たくさんの方々助けられ、今こうして生き  
ています。**15年たっても、私たちの街にはまだ帰らぬ家族  
を探す人がいて、私は震災を風化させないために語り部を  
しています。今回は**支援してくれた海外の方に直接お礼を  
伝えることができ、うれしかったです。**

## VOICE 青少年赤十字メンバーの声

石巻高校 2年  
まえだ りお  
前田 理央さん



**震** 災のとき僕は2歳  
だったので記憶は  
ほとんどないです。  
今回、トルコの被  
害を聞いて、東北  
と同じように苦し  
んでいる人々が  
いると知りました。**東北も、世界も、助け合っ  
ていくために、知ることが大切だと思いま  
した。**

いまでも続く支援

「トルコ・シリア地震3年 赤十字の救援・復興の歩みと防災への取り組み」についてはコチラ▶

